「笹川杯作文コンクール 2009」～日本語で応募～ 三等賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

「会えてよかった」

浙江理工大学　姚林芳

今年の春、私は日本に留学にいった。もともと中国では夏こそ「別れと出会い」の時期だが、今度は日本人にとっての「別れと出会い」の春の季節を体験した。

これから、先に何が待っているのか、誰と出会うか期待しつつ、ただ半年の短い期間しか日本にいないから、どうせすぐ別れるから、誰も私の出会いを大切してくれないかなあなどと思って落ち込んだ。といっても、私は日本人と交流したい気持ちでいっぱいだった。外国にいる寂しさを苦しんでいるよりも、自分で積極的に日本人との出会いを作ろうと思った。

春の半ばが過ぎて、バイトを見つけた。住んでいる町にあるひとつ高級な温泉旅館でサービスをする仕事として、和食を一品ずつ出したり、紹介したり、お皿を下げたりしていた。中華料理の出し方と違って、お膳料理は新鮮さと旨さを保つために、お客さんが食べ終わりそうな時を見計らって、また板場に頼んで、次の料理を出すやり方だ。そうすると、板場の料理人と親しくなった。仕事にまだ未熟な私はいつも自信なさそうな声で料理を通していた。「ヨウさん、すごいね、メニューはちゃんと覚えたね。」朗らかな声で私に声をかけてくれたのは板場で蕎麦を作っているおばさんの飯沼さんだった。私はちょっと恥ずかしくて何もいえなくてただ笑顔で返事した。その時以来、飯沼さんも忙しい時にセットするのを手伝ってくれたり、心細い顔をしていると「もうベテランみたい」と褒めてくれたりして私を支えていた。私があそこでバイトを続けられるのはほんのわずかの何ヶ月しかないということはみんな知っていた。でも、飯沼さんはこんな私に特に眼をかけてくれた。「私の妹も小さいころから中国で育ち、しかも何十年も中国人に育てられて大きくなった。ヨウさんのことを見ていると妹のことを思い出して切なくて・・・・。」この話を聞いた時は私がもうすぐバイト先を離れる頃だった。これから多分彼女とは最早一生を通して会えないだろう。

日本語で一期一会という言葉はずっと前から知っていた。茶道の精神として、生涯にただ一度見えることを大切にするという意味だ。飯沼さんから、この一期一会の重さと真の意味がひしひしと伝わって来た。

一度しか会えないならどうでもいいじゃなくて、その逆、一度しか会えないからこそこの出会いを大切にするということが日本にいた時、日本人の行動からしみじみと感じたものだ。

深く考えれば、毎日買い物に行くと、レジや店員は素敵な笑顔で接してくれるのはなぜか、ただ利益を得るためにいいサービスをするのか、私はそれだけではないと思う。少なくとも、私がバイトをしていた温泉旅館の社員達はそうではないと信じている。雨の中にお客様の姿が見えなくなるまで見送りをしている彼女達は一期一会の大切さと名残り惜しさを心を込めてお持て成しをすればこそ、このような素直な笑顔が出てくる。更にお客さんへ気配りができるのではなかろうか？

東京で道に迷った時、道を教えてくれたおばあさんに「ありがとう」をいて分かれた。それで、振り返ってみると、おばあさんはまだこちらのほうに向いてあそこに立っていたまま、私がちゃんと正しい道を歩いていくかどうかを見守っていた。

留学していた間、偶然に知り合ったあるお年寄りは何度も車で私が住んでいた国際交流会館まで迎えに来て、いろいろな所を案内してくれた。彼がかなり離れている町に住んでいるのは最後の別れまで分かった。などなど日本人から伝えられた大きな感動は言葉では表せないくらいだった。このような包み込まれるような優しさや繊細な感情が胸に響いて、私の心に印象的に残った。まるで「一生に一度だけだが、会えてよかった」とみんなが言っているようだ。

帰国の旅についた時、飛行機で同席していた人は四十代の日本人の女性だった。別れの悲しさがまだ消えていなかったのか、一人旅で寂しかったのか、私は泣きそうにしていた。「私は半年間中国に住んだことあるよ。その時中国人に大変お世話になった。彼らの手伝いがあったからこそ、半年の生活がうまくいけたんだ。私達はもっと早めに出会っていれば、私の家に遊びに来れたのにね……」彼女のおかげで、日本にいる最後の最後の時もいい思い出になった。上海に着いた後、彼女はずっと荷物を持ってくれた。別れ際に、彼女はぎゅっと私の手を握って「頑張ってね、元気でね、再見。」と私の目を見ていった。

空港を出た時はすでに夜になっていた。明るい月がぽっかり夜空に浮かんでいた。自分はもう中国に帰ってきたのがはっきり分かった。仰いで月を見ると、日本にいる友達も今私と同時に月を見ているのかなと考えていた。どんなに遠く離れていても、国土が違っていても、この月は一緒だ。